

C-15 室町時代の遺品、熊野速玉大社の御神服について、(第5報)
福島大教育。 栗原澄子

目的 — 室町時代の遺品を細かに調べ、それが当時の社会の気候、風土、生活様式などにどれだけ適応していたか、その美臭・欠点を研究する。

方法 — 前報につづき、今回は室町時代の遺品 — 伊号唐衣・呂号袖・伊号袖・知号海賦裳・保号海賦裳 — の色相・染料・各部の寸法と地の目、裁ち方推定図、縫製に用いた糸を調査した。

結果 — 袖の各部の寸法と地の目は、先に報告した室町時代の遺品 — 保号薄衣 — とほぼ同じであり、裁ち方推定図は、室町時代の遺品や、鎌倉時代の遺品 — 袷子領・小袷子領 — 類と大体同じである。唐衣の形態は、髪置きのないもの(このほか時代が古いといわれている)と、あるものとの種があるが、今回の唐衣は後者である。海賦裳は、現存する遺品の中では、熊野速玉大社にのみ残されているもので、裳と袴の中間のような形態である。8腰ある遺品のうち、どれも前・後の面に手描の海浦文様があるのが特徴であるが、今日その着装方法は明らかにされていない。縫製に用いた糸は、どれも先の室町時代の遺品とほぼ同じであり、色相は、鎌倉時代の色の呼名とそのマゼセル数値にやや似ている。染料・助剤は現在化学的検査中である。